

英語科における言語活動

本校英語科の目指す生徒の姿

主体的に表現力の高まりを目指す生徒

具体的には・・・

- ・英語で表現したい、伝えたいという思いやメッセージを
- ・既習表現を活用したり新出表現を取り入れたりしながら
- ・英語で表現する力を意欲的に伸ばそうとする姿

各單元における明確なゴール（評価規準）の設定が必要

單元ごとに設定する明確なゴールを通過する（させる）ことが、主体的に表現力を高めようとする生徒の育成につながると考える。

言語活動 = 実際のコミュニケーションを目的として、
習った英語・身に付けた英語を活用する活動

- ★必要となる要素 → ①生徒の思考法の把握（比較、経験の想起、具体化、一般化、関連付け）
- ②予め設定した評価規準との差異の確認～求める表現への誘導
- ③指導の手立て（話し合い、既習事項の確認、全体での共有）

明確な評価規準の設定 ← **本校英語科の重点としたところ**

- ★必要となる要素 → 「表現力が高まった」と教師が判断する表現の規準の設定
- 例 I like Toyama better than Tokyo. For example, we can eat a lot of delicious fish.
【具体的な例を示すことで、説得力を付加している】

思考を深めることで、解決へ向かうことになる課題の設定

- ★必要となる要素 → 言語の使用場面、動機（必要感）、言語の働き、言語材料
- 例 「自己紹介をしよう」ではなく・・・「より自分のことを伝える自己紹介をしよう」

基盤となるもの（言語活動を下支えするもの）

- ★思考力・・・聞いたり、読んだりした内容について考え、理解する。
- ★判断力・・・学習した語彙や文法等の中から、適切なものを判断・選択する。
- ★表現力・・・自分の意見・考え・思い等を話したり、書いたりする。

- ・英語の4つの技能「聞く」「話す」「読む」「書く」のバランスがとれた「総合的活動」
- ・英語の4つの技能「聞く」「話す」「読む」「書く」の複数を関連付けた「統合的活動」

本校英語科の捉える主体性

生徒が表現力を高め、自ら学んでいこうとする態度を育成するためには「どうすれば、これを伝えることができるのだろうか」「・・・するためには、どうすればよいのだろうか」等の課題意識をもたせることが必要となる。本校英語科においては、このような意識の高まりを「主体性」と捉え、それを育成するために、主として次の2点を授業に組み込むことを行ってきた。

一つは、英語の使用場面を自分自身の問題として捉えることのできるよう「言いたくなるような場面」「言わなければならない場面」の設定である。こうすることで、英語使用の必要感、切実感を与えることができる。もう一つは、「英語では何と言うのだろうか」「習った表現で言うことができないだろうか」と言語材料をもとに、課題の追究・解決へと向かう意識をもたせることである。

評価規準の設定

与えられた場面に応じ、自分の意見や考え、思い等、内容の伴ったメッセージを主体的に発信することのできる生徒が、本校英語科の目指す生徒の姿であるのは先述のとおりである。しかし、「何をもって、よしとするのか」「どのような内容について言う（書く）ことができれば、表現力が高まったとることができるのか」などの、生徒が英語で表現したものについての評価規準については、具体的な検証は進んでいなかった。

そこで、平成25年度においては、次のことに主眼をおいて研究を進めてきた。

まずは、教師が具体的な表現例（英文）を、「二つを比べた上で、片方のよさを表現している」「自分の経験を表現することで、説得力を付加している」等の視点から、評価規準として予め設定しておく。言い換えるなら、「このような具体例で示される英文を表現する力を生徒に付けたい」という明確なゴールをもつのである。そして、実際の言語活動の中で表現された英文を評価する。さらに、事前に準備しておいた手立てを講じながら表現力を高めていくという、形成的評価の考えをベースにしている。

単元ごとにこのようなゴールの姿（生徒に付けたい力）を設定し、各単元が終了する度に生徒の表現力が高まっていくという、少しずつの段階を踏んだ授業を展開してきた。

また、既習事項を繰り返し学習したり、他の言語活動で身に付けた思考法や表現の仕方を再び利用したりすることで、スパイラル的に表現力が高まっていくものと本校英語科では捉えている。

言語活動の実際

各単元において明確なゴールを評価規準として設定した後は、どのような言語活動が生徒の思考・判断に基づいた表現を、教師の求める表現にまで高めることができるのか、という物差しで授業をつくっていくことになる。生徒の思考を、その表現したもの（発話、作文等）から見取り、教師の想定するいわゆる「A」の規準までに導くために、授業においては様々な言語活動（タスク）とそれに付随する手立て、工夫が準備されなければならない。

言うまでなく、生徒に示す課題は「考えてみたくなる」「英語で表現したくなる」場面でなくてはならない。また、学習指導要領で示されているように英語における4技能のバランスや関連付けを図った活動であることを前提としている。次頁からは、各学年における実践例を紹介する。